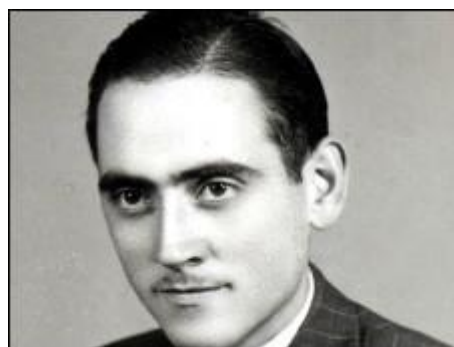


Manuel Lozano Garrido “Lolo” (マヌエル・ロザノ・ガリード “ロロ”)



カトリックとして、新聞記者として、作家として精力的に働いた若い活動家。身体障害に苛まれながらも若い人々に喜びを伝えた。

### 1：ロロは誰か？

ロロはカトリックの若い活動家であった。彼は 1920 年にリナレス（ハエン、スペイン）に生まれた。わずか 22 歳の時、進行性筋萎縮症が彼を車椅子に座らせた。彼の体は完全に動けなくなってしまったのだ。生涯最後の九年間も、目が見えないまま過ごした。

しかし、ロロは福音を真剣な眼差しで見据える、若きキリスト教徒であった。マルティン・デスカルソ神父は彼のことをこう言っていた。「キリスト教徒として生きることが仕事だった。信じるのが彼の仕事だった」

福音を真面目に受け止めていたあまり、ある日テゼのブラザー・ロバートは彼の家を訪れた。彼の姿を目にした。彼の声を耳にした。見る影もないあの小さな体を目の当たりにした。彼はペンをとり、部屋の片隅からロロの仕事机を照らし出していたランプに、次のようなことを書いた。「“ロロ”、苦痛の秘跡」

しかし、不変の笑顔の内に朽ちることなき喜びを持ち続けた、この、キリストの若き使徒は……、“苦痛の男”でありながら、助言を求めて自分の元に寄り集まった何百もの若者や大人に喜びを撒いた彼には、秘密があった。彼の少年時代を漫画化したブランカ・アギラルは、自分の作品に『ロロの秘密』というタイトルをつけたほどである。

### 2：ロロに喜びをもって苦痛を生き抜かせた、その秘密とは？

ロロはスポーツと自然を愛した若者であった。いつも喜ぶいたずらっ子で、遊ぶことに喜ぶ少年であったが、キリストの弟子として世界を手にする道を歩み始めることを渴望し始めた時、彼の喜びは大きくなったのだ。

1930 年代に彼はリナレスのヤング・カトリック活動センターで、使徒となった。“彼にとっては、カトリック活動がすべてだった”

カトリック活動を通して、彼は聖母マリアを熱愛することを学んだ。体より動きを奪われてから死ぬまでの 28 年間、彼は作家として、また記者として聖母マリアについて多くの美しいページを綴ることになる。そのページの一つ一つは、やさしさと忠



実な愛に満ちている。

カトリック活動センターで、後に自分の人生を変えることになる、聖体に対する熱誠を培った。コープス・クリスティの祝日、聖なる木曜と聖職についての彼の著作が現存している。洗礼を受けたところであり、かつ永眠している場でもあるリナレスの聖マリア教会の正門から見て正面に自宅があった。不自由な体にもめげず、仕事を中断すると露台（バルコニー）に行って、そこでよく次のように言っていた。

「さて、ご聖体と向かい合ったところで、イエス様とお話ししよう」

### 3：聖体を通してロロが体験したこと

思春期だったロロは迫害される者となった。戦時中、彼はご聖体を隠し持っていた。 sacramentとなったイエスを賛美しながら聖なる木曜日の夜を監獄で過ごした時、聖体の体験はロロにとってさらに深いものとなった。その聖体は、花束の中に隠されて彼に送られたものだった。

聖体の秘跡はロロに大きな影響を与えた。マルティン・デスカルソはなんと美しく彼を描いたことか！

「マノロの家でミサだ！」

なぜ彼はそう言ったのかということ、それは聖体拝領が教会にとって、また一人一人のキリスト教徒にとって何を意味するのかを知ったロロは、もう“神と共に円卓を囲む”ことなく（訳注：すなわち、会話することなく）生きたくはなかったからだ。“神と共に円卓を囲む”という言葉は、彼の著作の一つのタイトルである。ロロにとって聖体拝領とは、自分の弱みを支える強さであり、苦痛の内に感じる喜びであり、使徒として感じる渴望の源であり、筆に込められる力の泉であった。

### 4：使徒

このロロは、キリスト教が迫害されていた頃の敵愾心に満ちた世の中で、使徒としての立場ゆえ自身の命が危ぶまれながらも、カトリック活動を広める者として村から村を巡り歩いた。心に躊躇が入り込む隙を与えることなく、ラジオを通じて宣教した。キリストに魅せられた彼は、キリストにこう言う。「どうか、あなたの心をお貸してください。努力することなくすべてが簡単に実現することを願う自分のエゴイズムのためでなく、あなたにささげるべきすべての愛を傾けるといふ自分自身の義務を、よりよいものにするために」これは、彼の著作の一つである、「**Las golondrinas nunca saben la hora.** ツバメは時期を知らない」という本にある言葉だ。

この精力的なロロは苦痛の訪問を受ける。「苦痛は私の運命を激変させたかに見えた。教鞭を捨て、自分の札を剥ぎ取り、ただただ孤独と沈黙の中に沈んだ。

未来の自分の姿として夢見たあの新聞記者は学校に入らなかったのだ。やはり未来の自分として思い描いていたあの使徒は、もはや出かけることをやめてしまったのだ。しかし、自分の理想と意欲は私を引き込むことをやめないから、

私は今まで夢にも見なかった満足感を噛みしめている」と、彼は「*Cartas con la señal de la cruz*. 十字架の印をつけた手紙」で書いている。



## 5：全身不随

このカトリック活動の使徒は、神から“病者の導き”を受ける。「私の職業：全身不随」

その病は思いのほか深いあまり、彼の体からすべての動きが消滅の一途を辿った。彼の体は痛みにならず骨しか入っていないねじれた入れ物になりつつあった。しかし、彼は逆らわず、苦痛を訴えなければ、自分について話そうとすらしめない。右腕の動きが失われた時、左腕で字を書くことをおぼえた。左腕も同じように動かなくなった時、テープレコーダーにむかってしゃべることで、車椅子に拘束されながらも働く、疲れを知らぬ作家にして新聞記者となったのだ。

## 6：作家にして新聞記者

ぜひともお話しておきたいエピソードが二つある。まだ指にわずかな動きが残っていた頃、彼にタイプライターが贈られた。いったい、彼がそのタイプライターで書いた最初の文章はどのようなものだったのだろうか？彼は次のように書いた。「主よ。感謝します。これで最初に書く言葉は、あなたの名前です。いつもこの機械の力と魂となりますように。この機械が貴く、清く、希望に満ちたことに使われるよう、あなたの光と裏表ない心が、この機械で働くすべての人々の精神と心に宿り続けますように。」

そして彼の“円卓”でミサが行われてもいいという許可を得たとき、虫の知らせがあった。彼は次のように予感した。「タイプライターを持ってこい………なんだって？私は気が狂ったのか？………いいから持ってくるんだ！さあ！はやく！持ってきて、テーブルの下に置くのだ。そうすることで十字架の縦木がキーボードにめり込み、そこに根をおけるように。」

根！そのとおりだ！彼の人生において十字架の木はなんと深く根付いたことか！その根から芽生えた木はいかに実ったことか！

## 7：“シナイ”

部屋の片隅で、身動きできず車椅子に座ったまま、彼は新聞記者となり、作家となったのだ。そればかりか、彼は新聞社の中で小さな月刊誌の創立者となった。「“シナイ”：新聞社内での祈りのグループ」は、12人の病人が一つの修道院と共に、ある特定のマスメディアの“霊を守護する”という目的で創立された月刊誌であった。やがて、その病人の数は12人から300人に膨れ上がり、口は月ごとに発売される記事を通して、彼らを励ました。そうして、モーゼ

が両腕を開き切ってシナイ山でイスラエルを助けるために祈ったように、腕も足も上げられない彼らが、新聞記者たちにとってのクリスチャンとしての支えとなるのであった。

ロロは“新聞記者の十戒”と“新聞記者たちによる祈り”を書いた。彼はキリスト教徒の新聞記者だったが、二つの側面からそうであった。なぜかという、まず彼は宗教的なテーマについて語り、そして様々な事象・事件をよく教会の視点から、信仰上の視点から語ったからである。鉱業、都市計画、学校、単作農法、農作、国内の記録や事件、宇宙の進化などなど。

### 8：毎日仕事する病人

ロロは新聞記者となってゆく。作家になってゆく。彼は文学賞を受け取るたびに、こう言う。「額の汗で糧を勝ち得ている」霊的を題材に九作の本、日記や年代記、随筆、自伝的小説、そして月刊誌に何百もの記事を書いた。

ロロは苦痛にうずく身体を鞭打って働く者。毎日働く病人だった。彼の人生においては、毎年、きつい仕事が鋭い病気と組紐のように交じり合っていた。しかし、彼の人生の中では、自分が持っていた秘密と同じように、マリアの憐みと聖体の秘跡が最大の領域を占めていた。その二つの恵みから彼の教会への愛が湧き出ていたのであり、車椅子から立ち上がれないにもかかわらず、汲めども尽きぬ精力で宣教活動させたのであった。

### 9：教会への愛

教会が宗教会議していた日々と並行して、ロロの教会に対する愛が、一日ごとに育まれていったことは、彼について語るうえで重要な点になると言っておく必要がある。視力まで奪われた彼だったが、記事や、神父や第二公会議以後のバチカンの神学者たちの反省をきいて、心に刻み付けた。彼は妥協する教会の姿にどれほどまで生き生きと入り込んだことか！

### 10：伝染する喜び

苦痛の価値は、平安と喜びをもって神の計画を受け入れるということの意味で、彼の人生に染みとおっていった。すると彼の毎日が、人との付き合いが、伝染していく喜びとなっていた。

病をおしてルルデスの洞窟へ巡礼したロロは、聖母にこう言った。

「喜びをささげます。ありがたい喜びを」

そして、聖母は彼の中に喜びの種をまき、喜びを増大させた。彼にユーモアを与え、彼はそのユーモアを自分の車椅子に近づくすべての人に伝えた。

### 11：普通でないことを普通に生きて

ロロの中で別次元の何かが膨れ上がっていった。その別次元の何かとは、異常なこと、すなわち自分の体が背負っていた途方もない苦痛を、誰もが日常感じるような事象のように生き、自分の恐ろしい状況を普通のことのように受け止めようとする心だった。ロロの並々ならぬところは、自分が生きていた厳しい状況を普通のことのように見える状況として受け止めたことである。まるで

自分が健全な肉体を誇っているかのように！彼は 20 世紀に生まれたヨブのようだった。

## 12：若者の助言者

彼の家には、身分、状態を問わず、多くの人々がたずねてきた。労働者、聖職者、患者などなど……。だが彼の友達の中には特に若者が多かった。ロロは彼らに対して特別な感性をもっていた。若者たちにとって、ロロはいつも明るく、明るさを伝える人だった。

彼の友達だった若者の一人は、彼のことを次のように言っている。「親しみやすく、いつも笑顔を浮かべて、僕の人生や家族、計画や仕事などについて興味をもった。だから僕も誠実になれて、彼に自分の人生と悩み事を語った。すると彼は、僕のことを理解して、ゆるしてくれる、父なる神について話してくれた。キリストの教えの証しをする必要性について、他者に対する愛の必要性について話してくれた。僕は彼に会うたびに、前よりも明るくなり、ずっと探していた喜びを見つけたと感じられた」若者たちの多くは、彼について同じ意見を持っている。若い学生やリナレスの若い炭鉱労働者や社員が彼の家を訪れていた。ロロの心はあまりにも寛容だったので、友達の数は日増しに増していったのである。

## 13：1971年11月3日

1971年11月3日のこと。彼の命は燃え尽きた。聖マルティン・デ・ポレスの日であった。ロロが、自分のカウチが部屋の中で占めていたわずか一平方メートルの片隅で過ごしたように、あの聖人は修道院の片隅で聖人としての内なる光を強めていったのだ。彼の傍らで、ロロの友達会の顧問で、神父でもあるこの私、ラファエル・イゲラス・アラモは、九年間彼の近くにいたことができたのを喜んでいる。彼の隣で主の祈りを唱え、そして一緒にマリア様にこう願っていた。

「私たち罪人のために今も死を迎える時も、お祈りください」

祈りの真っ最中で、彼の“胸に入りきらないほど大きな”心は、とまってしまったのだ。彼を診察していた医師は、彼の寛大な心のことをそのように言っていたぐらいだ。

奇しくも12年前の同じ日、ロロはこう書いている。

「今日、空気には、長い間会っていなかった友が客車から下りてくるのを見つけた時のプラットフォームのような雰囲気が漂っている。今、君はもうここにいる。私のとなりに座っている。そして私は喜んで君の肩に腕を回すことができる」これは、彼の著作「神は毎日話す」にでてくる言葉である。長く厳しい病の年月という十字架に釘付けにされた自分の最愛の友、神と抱擁する瞬間が遂に訪れたのであった。

生きていた頃の彼を知っていた者たちは、彼が遺したものを受け継いだ。知人たちは彼の著作を再編集し、彼を福者とするための運動を開始した。フランシスコ会のような清純さを誇っていた彼の人格のことを考えると、おそらく、彼は今頃、天国で笑顔を浮かべていることだろう。

#### 14 : 2007年12月17日から2010年6月12日まで

2007年12月17日に、教皇ベネディクト16世は、尊者マヌエル・ロサノ・ガリード“ロロ”の生涯と美徳は英雄的であったと述べた。

2008年1月、聖人たちのための会「**Congregation for the Causes of Saints**」が、“**Super miro**”（素晴らしい事象とするかどうか）の調査を開始した。ある人物の生涯と美徳に英雄的な特徴が見出されたと公認されるまでは、その人物自体に、あるいは身の周りに何かしらの奇跡的な事象が起こったかどうかの調査をはじめないのが、バチカンのルールである。彼の場合はその時まで“尊者”と呼ばれていた。

医学会、神学審判者、枢機卿や司教たちが2009年7月29日に集まって行われた会議の後、彼にまつわる、ある回復の事件は奇跡と断定された。

2009年12月19日、ベネディクト16世は会議での結論に賛成し、布告用の書類に署名した。ロロにまつわる奇跡は最終的に認定されたのである。

ロロ——全身麻痺かつ盲目だった、マリアと聖体を敬愛し、自分が愛した教会の愛する子、苦痛の中でも喜びを持ち、使徒にして助言者でもあった、カトリックの活動家、新聞記者、そして作家——。まさにこれが彼の名刺であった。

2010年6月12日、リナレスで、彼は教皇により、そして聖人たちのための会の会長アンジェロ・アマト閣下により、福者と宣言された。

